

医療・健康

向き合う



2020年5月、国連は「新型コロナウイルス感染症に対する障害インクルーシブな対応」を発表した。障害や疾患のある人への影響が大きいことを警告し、孤立しやすい存在であると指摘した。

VHOnetのメンバーにも多大な影響を与えた。疾患による感染リスクが高い人、障害があるため人による支援が欠かれない人。いずれも患者団体などでの交流によって孤立することなく暮らしてきたが、多くの団体で定例の患者会開催が

一般社団法人 VHO-net 理事 増田 一世さん ④

難しくなった。

この事態にVHOnetでは誰一人取り残すことなく、オンライン会議に参加できることをめざした。まずは全国9地域で取り組まれている地域学習会とワークショップのオンライン開催を目指した。

当時VHOnetの事務局を担っていた製薬大手ファイザーのコミュニティ・リレーション部の喜島智香子と後藤慶子が活躍した。各地域学習会の開催前には、時間を変えて何度も接続テストを行った。視覚障害があつて苦労された会員もいたが、すべての人がオンラインでの学習会に参加できるまで接続テストを重ねた。

東海学習会の世話人(当時)を務めていた奥田洋子(もやの会中部ブロック)は「最初は不安しかなかった。でも何度も接続体験が開催され、何とか接続できるようになった。今では自分の団体で会員をオンライン

コロナ禍でもつながり続ける

会議に招待し、資料を画面で共有することもできるようになった」と振り返る。VHOnetに参加し、さまざまな体験を重ね、コミュニケーションの大切さを実感したといい、「人とのつながりを大切にしたいと思う」と話す。

最近ではワークショップや地域学習会は会場とオンラインのハイブリッド開催となってきた。移動に困難がある人にとっては参加の選択肢が増えた。久しぶりの対面では再会のうれしさも増す。

VHOnetには多様な人たちが参加している。コロナ禍で孤立せずつながり続けることを意識してきた。企業や専門職との新たな連携の形も見いだしてきた。VHOnetだからできることを模索しつつ、障害や疾患の体験をプラスに転じて誰も取り残さない社会に貢献できる団体として育っていった。

(この項おわり)